

となりの 私の スゴイ人 第2回

障がいのあるなしを超えて 純粋に真剣勝負できるのが ブラインドサッカー®の魅力

アクサ生命 広報部 川村 怜さん

東京2020パラリンピックの5人制サッカー（ブラインドサッカー）に出場した川村怜さん（32）。日本代表チームの主将でエースナンバー10を背負う川村さんに、ブラインドサッカーの魅力を伺いました。

声と音を頼りにプレーする

東京2020パラリンピック5人制サッカーで日本代表チームは5位入賞でした。「メダルを逃したのは悔しいですが、世界ランク3位のスペインに勝ったことは大きな収穫だと思います」と川村さんは振り返り



ボールを蹴る川村さん(写真中央)

©JBFA/H.Wanibe

ます。

ブラインドサッカーは、視覚に障がいのあるフィールドプレーヤー4人と晴眼者（視覚に障がいのない人）か弱視のゴールキーパーでチームを構成、ピッチ外から晴眼者の監督とガイド（相手ゴールの情報伝える係）が声で指示やサポートをします。

転がるとシヤカシヤカ音が鳴るボールを取り合いながら、選手と監督とガイドが声をかけあって試合を進めます。そのため観客は音を立てずにプレーを見守っていて、ゴールが決まると歓声が沸き起こります。「静寂から一転して爆発的な大歓声に変わるあの瞬間が好きですね」と川村さん。

パラリンピックの種目の中で、障がい者と健常者がチームとして同じ

ピッチに立つのはこの競技だけだそうです。「目の見えない選手が打ったシュートを目の見えるゴールキーパーが本気で止めに行く。見える見えない、障がいのあるなしはピッチ上には存在しません。障がい者と健常者が純粋に真剣勝負できるのが魅力です」と熱く語ります。

小柄ですが細マッチョの川村さん。試合では海外の大柄な選手にも当たり負けしない体幹の強さを感じられます。特徴的なのが、張りのあるしつかりとした聞き取りやすい声。その理由は、騒がしいプレー中も自分の意思・状況を仲間伝えられるよう、代表チームのメンバーは専属のボイストレーナーから発声練習で鍛えられているためです。

サポートするはずが選手に

川村さんは5歳のときにブドウ膜炎を発症、視力が著しく低下しました（のちに症状が悪化し全盲と診断）。サッカーが大好きで小学6年生の頃はプロサッカー選手が夢でしたが、視力のハンデキャップは超え難く、中学・高校は陸上部でした。「自分がサッカー選手として第一線

で活躍することは難しいという現実には受け入れられたので、トレーナーのように選手をサポートする立場になりたい」と、鍼灸師とマッサージ師の資格を取るために筑波技術大学に進学しました。

そこでブラインドサッカーと出合っただけでその魅力にはまり、卒業後は盲学校の教員をしながらブラインドサッカーを続け、2021年9月までは日本代表チームの主将を務め、現在はクラブチーム（パペレシアル品川）で競技する傍ら、アクサ生命でダイバーシティの広報活動を行っています。その一環として、小中学校等に出向いて視覚を遮断して行う体験型ダイバーシティ教育プログラム（スポ教）の講師も務めています。

最後に、視覚に障がいのある方への接し方を教えていただきました。「白杖を突いて街中や駅を歩いている私たちに『大丈夫ですか』『お手伝いしましょうか』と声をかけていただくことがあります。人混みだとなんか誰に話しかかからないので、肩など体の一部をトントンと触りながら声をかけていただくとすごく助かりますね」